

「友の会」2016年度研修旅行

源頼朝時代の鎌倉を求めて

報告 松家直子

今回の見学のテーマは、源頼朝はどのようにして鎌倉をつくったのか、その造営にこめた意図は何か。企画してくださった小澤拓美先生から、集合場所と見学コースの案内とともに、見学予習クイズが送られてきた。

2016年11月15日(火)10時、鎌倉駅西口集合。雨が上がり日が射してきた。平日なのに西口広場は各種団体であふれていたの、ホテルニュー鎌倉の前に移動する。22人が参加。4班に分かれて小澤先生の分厚いテキストを手に出発した。

巽(たつみ)神社の本殿の前で、友の会代表の増田先生と小澤先生の挨拶。ここで報告を書けというお話があり、いつもぼんやり聞いていたのが、今回はしっかり



メモをとることになった。巽神社が西面しているのは、武蔵の国と結ぶ官道・今小路がある。その南(今の御成小学校あたり)から奈良

時代の鎌倉郡衙(ぐんが)の跡が発掘された。今小路と六浦路で結ばれる若宮大路は、南北にまっすぐではなく右に27度傾いていて、鶴岡八幡宮を越して鷲峰山(じゅぶせん)に到る。十王岩の展望台に建長寺から登ってみれば、眼下に若宮大路が由比の浜へ伸びるのが見えるは

主な内容

友の会研修旅行 源頼朝時代の鎌倉を求めて	松家直子 1
案内担当より 鎌倉史に親しむ	小澤拓美 4
幕末の旅日記《鎌倉見物の部》	重政文三郎 6
都歴研史跡見学《多摩の自由民権》	村木逸子 10/全歴研大会(多田) 12
都歴研講演会「米ソ冷戦時代からグローバル化世界へ」	久保文明(豊田記) 13
紀行：満州開拓平和記念館を訪ねて(村木逸子)	15/イラン・イスラム共和国の印象(増田克彦) 18/柳川探訪記(黒田比佐雄) 20
今、よみがえる真慈悲寺—幻の大寺院を求めて—	増田克彦 23
友の会第11回総会速報/会員の著書/友の会助成金/会員の計報	24

1 実施日 2016 (平成 28) 年 11 月 15 日 (火) 天候 曇・晴

2 見学コース

鎌倉駅 10:00→正宗工房→今大路→巽神社→正宗稲荷→政子・実朝の墓 (伝) →寿福寺→若宮大路・三の鳥居→舞殿→丸山稲荷→鶴岡八幡宮本宮→宝物館 (拝観) →柳原休憩所 (昼食) →若宮→鶴亀石・若宮遥拝所→白幡神社→二の鳥居 (石材再利用) →流鏑馬馬場→西御門→太平寺跡→来迎寺 (拝観) →頼朝の墓・法華堂跡→荏柄天神→二階堂永福寺跡 (入場) →大塔宮バス停 (解散) 16:35

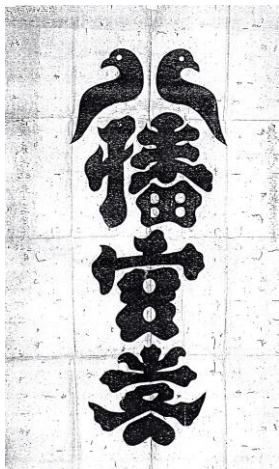
ずで、左右に山が迫る間の湿地帯に道を通す大工事を構想する頼朝の姿を想像した。

巽神社から正宗稲荷を経て竹垣の家々が並ぶ細い道を登ると、亀谷 (きこく) 山寿福寺の裏手で、政子・実朝の墓と伝わるやぐらが並ぶ (実際は供養塔らしい)。500以上あるといわれるやぐらは身分のある人の墓で、庶民は死ねば地獄谷に捨てられた。寿福寺には入らず、総門の前で記念撮影。

JR の踏切を越えて川喜多映画記念館 (黒澤・三船映画を上映中) の前を通り、鶴岡八幡宮の参道へ。急に人が多くなる。

鶴岡八幡宮の祭神の応神天皇は、倭の五王の一人とされる実在の最初の大王。小澤先生の説明に熱が入る。源頼義が由比若宮を創建したのが前九年の役に勝利した翌年 (1063 年) で、場所は小町大路の南の元八幡社あたり。そしてその子義家が後三年の役に向かう前年 (1081 年) に修復した。今夏 7 月の東国史の会の旅 (小澤先生に案内していただいて平泉・奥六郡を歩く) につながっているとわかる。その後頼朝が房総から戻ってきた時に由比若宮を遥拝した

場所 (小林郷北山) に社殿を建て、さらに石清水八幡宮を勧請して本宮を正式に造営した (1191 年) ので、八幡神と鳩の伝説が伝わった。宝物館で見た楼門扁額に「八幡宮寺」とあり、その八の字が不気味な鳩の形をしている。テキストにある八幡宮の絵図



明治以前は「八幡宮寺」と称した



面 3 枚を見比べて、かつてあった密教系の御本地堂、経蔵、はじめはなかった舞殿などと確認しているうちに目が疲れてきた。宝物館を出た所で、小澤先生が鳩サブレをふるまってく



上：八幡宮境内 下：頼朝墓

ださり、ホッと一息。もう 1 時過ぎだ。柳原休憩所でチャーハンなどの昼食をとる。

午後の部を再開。本宮の階段下にある若宮は修理中だが、怨霊を祀るもので基督教の聖霊にも通じるとか。近くの白旗神社には、源氏の家紋・ササリンドウがある鋳物製の大きな賽銭箱があった。ササリンドウは鎌倉市の市章だが、かつての鎌倉町の町章は鎌倉十井の一つ星月井 (ほしづくい) 由来の星と月で、鎌倉宝物館の南側の壁に刻まれていた。その前の東西に走る広い道が流鏑馬 (やぶさめ) 馬場で、「弓手 (ゆんで・左手) で弓を構え、馬手 (めて・右手) で矢をつがえて、馬を走らせながら的を

射るのだから、東から西へ駆け抜けるんですよ」と小澤先生の大熱演にみんな大笑い。

北へ歩いて来迎寺へ向かう。頼杖について夢見るような表情の如意輪観音像が魅力的で絵葉書を買った。石段の上は見晴らしがよく、日光が降り注いで多くの人がコートを脱いだ。石段の下が澤井信一郎監督の「早春物語」(角川映画)で瞳(原田知世)が梶川(林隆三)に出会った所だ。戻る道の西御門は、最初期の鎌倉幕府(大倉御所)の西端で、幕府はきっちり南北に造られ、右に傾いた若宮大路とは異なる。東に向かうと頼朝の墓、大江広元の墓と、急な石段を上り降りしなければならず、こんな場所に墓を造るのは平地がないためかと思う。頼朝の墓から向い側の谷を遠望して勝長寿院跡をしのぶ。義朝の菩提を弔うために造営され、実朝・政子もここに葬られた。大江広元の墓では、手すりもないので石段を上るのを諦めた。皆さん元気に上がられるのを見て負けてはならじと思いつつも、足取りはますます重くなる。荏柄天神社に向かうみちに、ひときわ鮮やかなハゼの紅葉があった。

いよいよ見学の最後の目的地、二階堂永福(ようふく)寺跡に着く。7月の旅で見た平泉中尊寺の一番高いところに建つ二階大堂(今はない)に頼朝が感激して、奥州藤原氏を滅ぼしたのち、怨霊鎮めのために建てた寺で、ぜひ見たかったところだ。発掘調査に基づき基壇と庭園が復元され、池に面して東向きに阿弥陀堂・釈迦如来を祀る二階堂・薬師堂が建ち並び、西日を受けて極楽浄土を現出した様を想像した。しかし、1405年の火災で焼失した後は再建されず廃絶してしまう。頼朝が造った三寺院のうち、勝長寿院・永福寺は失われ、八幡宮のみ残ったのは、現世の武運の祈願のために秀吉・家康らの寄進を受けられたためか。

解散場所の大塔宮バス停に着いたのは、日もすっかり暮れた4時半ごろ。何度訪れても鎌倉には尽きない魅力があるという小澤先生の深い知見に多くのことを学んだ。見学後間を置かずに小澤先生のとまとめと重政先生撮影の写真集を送って下さったので、この報告を楽しく書くことができました。ありがとうございました。



鎌倉史に親しむ

小澤 拓美

多くの方々のご参加・ご協力を得まして、無事終わりました。ありがとうございました。行事はどんなに準備をしても最後に勝てないのはお天気です。1週間前からの予報は、目まぐるしく変わり、当日まで安心できませんでした。結果的にはまずまずで、紅葉も美しく結構なことでした。

大学時代から「吾妻鏡」「玉葉」など鎌倉期の史料にはそれなりに接してきたとはいえ、今回の史跡見学を前にすると多くの疑問がわいてきて苦しみました。最近の書物・論文をあちこち渉猟して、分かったことも、当然ながら未解決のこともあり、そういう中で案内役を務めるのも忸怩たるものがありますがまずは終わって安堵というところです。

歴史用語なども分かりにくかったかもしれませんが、東国における最初の首都、鎌倉の成立期について理解を深めていただけたなら幸いです。

後から考えて説明が不十分だったところを何点か補足します。

・埋蔵文化財について

巽神社が面するのが今小路です。奈良時代の鎌倉郡衙の跡、あるいは鎌倉時代の武家屋敷跡が発掘された、現在の御成小学校敷地は、「今小路西遺跡」と言います。来春には、ここを含めての発掘品が、市の施設で初めて常設展示される予定です。本来は「市博物館」とすべきでしょうが、「市民交流センター」のような名称の建物の一部に陳列される、と市役所文化財係の説明です。世界遺産申請却下の際に、イコモスから「文化財保存の姿勢が薄弱である」と厳しい指摘をされたことへの反省も、残念ながらまだまだだと思います。

・若宮大路の構造について

鎌倉時代には幅33m余あり、その両側に約3m深さ1.5mほどの堀があったと申し上げました。

その面影はほとんど残ってませんが、私を知る限り1箇所だけあります。鎌倉駅から若宮大路にでて、左に曲がり鳩サブレの豊島屋本店に向かう半ばほどに、石の欄干が片側だけあります。欄干の隙間から下をのぞくと水がごうごうと流れています。暗渠となっている水の流れの先は、豊島屋の店先へ続きます。その店先の舗装の色が違うところがまさに昔の堀の跡ということになります。今度鎌倉を訪れた時に確認してみてください。

・若宮大路建設の目的について

政子の御懐妊は、口実でしかないのは当然で、私は宗教上、軍事上、経済上の目的と優等生的に申し上げました。鎌倉中心部の湿地帯の水はけを良くし、平地を確保するとともに、西の今小路・北の六浦路・東の小町大路（宝戒寺周辺から元八幡方向へ）の3つの道を結ぶという経済・民生上の理由が最大の契機かと思います。これによって水はけがよくなり、若宮大路周辺に北条・和田・千葉などの御家人の屋敷が出来るようになったとはいえ、庶民の住める場所ではありません。御家人のように井戸を掘る資力がなければ生活は不可能です。今小路西遺跡で発掘された、有力御家人と思われる屋敷からは立派な井戸跡が見つかっています。庶民は、化粧坂など山間部で湧水を利用して住むことになります。

・武内宿禰について

「クイズ解答と解説」で、4代の天皇に仕えたというが5代ではないかと、参加者の吉田寛治先生からご指摘がありました。日本書紀をしっかりと読みこむと、景行天皇25年以降に武内宿禰を使ったと出てきます。その後、成務天皇の代に大臣となり、仲哀・応神・仁徳と重用されたとあります。つまり、「仕えた」ということでは5代、「大臣」としては4代ということです。不十分な書き方で申し訳ありませんでした。いずれにしても数百年間のことで神話のようなものと言ってもよいのですが、このあたりにはヤマトの国土統一に関する何らかの史実が反映されていると思われます。



二階堂永福寺跡の発掘復元

・頼朝が造った3大寺院について

3寺院の役割を考えてください、とってそのままになりました。いかがでしょうか？

- ① 頼朝の崇敬する5代前の先祖源頼義と、その子義家の創建に由来する鶴岡八幡宮寺
 - ② 平治の乱で無念の死を遂げた父義朝（の首）を葬った勝長寿院（大御堂）
 - ③ 自ら出陣して奥州藤原氏を攻め滅ぼした直後に建立事業を始めた二階堂永福寺
- 私の勝手な考えで、整理してみると、

①八幡宮寺：現世の祈願寺。即ち、対平氏政権戦の勝利などを八幡神のもとで加持祈祷する密教的な場。今でいえば、受験合格を有名な寺に祈るようなものか。

②勝長寿院：祖先供養の寺。現代の多くの日本人が墓参りに檀那寺に行くというイメージに近い。後に政子も実朝もここに葬られた。

③永福寺：怨霊封じ・浄土往生の寺。吾妻鏡によれば敵味方幾万の霊を慰めるために建立したとのこと。頼朝が細部までこだわったのは、この世の極楽浄土を目指したのかもしれない。薬師堂（瑠璃光浄土）、二階堂（おそらくは釈迦如来）、阿弥陀堂（極楽浄土）という構成は、平安末以降の浄

土教の影響を受けたものだろう。建築は中尊寺大長寿院を模し、庭園・壁画は毛越寺を模したが、背後の山に落日するという配置は無量光院を模したものだろう。

・勝長寿院跡について

今回、「3寺院を回ります」といながら、予定コースにも入れていませんでした。頼朝墓のところから、「あの谷が」と説明しただけです。ご希望があれば、解散後ご案内しようと思いましたが、皆さんバスにお乗りになってしまいました。もっとも、現地には近

年の五輪塔が立っているだけで、寺院の痕跡は何も有りません。お配りした昭和2年の地図では、まだ全くの山林です。少なくとも戦後すぐに文化財保護の手を入れていれば、発掘などできたでしょうが、住宅が立ち並んだ今はもはや手の付けようがありません。しかし、住宅街ではありますが、吾妻鏡に出てくる関係記事を照らし合わせながら歩くと、いくつもの伽藍が浮かび上がってくるような感じのするいいところです。眼をあげると、若宮大路や大倉幕府建設のランドマークになった（と推定される）鷲峰山などが遠望できます。

・鷲峰山^{じゅぶせん}について

これは、ガンジス河中流域に現存する山に由来し、仏教で釈迦が悟りを開いたところとされています。細長い山頂であり、鎌倉の鷲峰山も細長いところが似ています。この山名は、吾妻鏡には出てきませんが、近くには鎌倉時代以来という十王岩があり、何らかの聖地という扱いであったことは間違いのないでしょう。なお、覚園寺の山号も鷲峰山と言います。

まだまだありますが、今後とも鎌倉史に親しんでいただければ幸いです。

幕末の大山参り旅日記

《鎌倉見物の部》

重政文三郎

駒木野佐藤日記とは

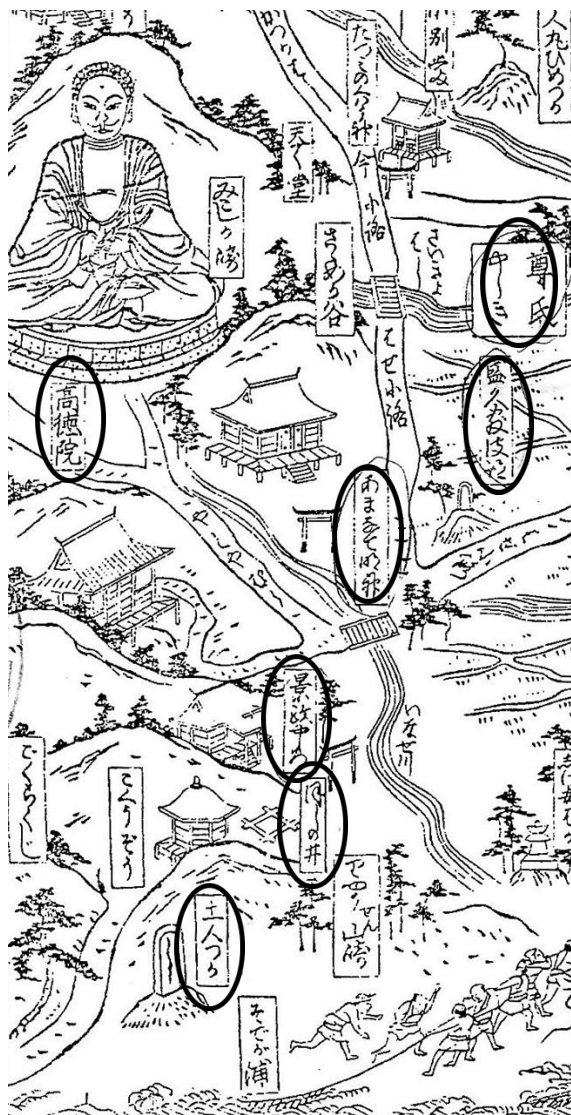
甲州街道駒木野関所の関所番の子・佐藤正雄に安政6年(1859)から幕末(1868)までの日記が残っている。その中に文久3年(1863)の大山参りの旅日記があるので紹介したい。彼はこの年19才になるが、和歌も交えて楽しそうな旅日記になっている。

駒木野関所は甲州街道の関所で、佐藤・落合・川村・小野崎の4家で関守をつとめていた。この日記を書いた佐藤正雄は、佐藤家の長男で関守の見習として父について働いている。文久3年のこの年19歳になる。かれは、当時駒木野の村に滞在していた国学者の堀秀成に師事して、国学や和歌などを勉強していた。同郷の先輩には、同じく堀秀成に師事している落合直亮・直澄・直言三兄弟や、川村正平がいる。落合兄弟は幕末の草莽の志士として活躍したことで有名であり、川村正平もまた、一橋家の家臣として幕末の政局の中で働いた。しかし、この日記の文久3年は、正雄たち若者にとってはまだ波静かな平穏な日々であった。

さて、大山参りの旅は、7月2日から8日までの7日間、佐藤正雄と小野崎健二郎・鈴木金平の若者三人、それに留吉・藤太郎・清吉の三人が従者としてついていた。

正雄の日記に従って旅程をたどっていくと、大山へのルートとして相模川水運を利用したことが注目された。江戸時代の大山信仰では大山頂上の石尊社が信仰の中心であった。真夜中になっても暗がりの中手探りで、頂上まで往復してその夜は大山の御師の宿へ宿泊した。

次の日からは江の島・鎌倉・金沢・横浜と観光の旅をしている。



鎌倉絵図 西南部 (延享・寛延1744~51の頃)
(部分拡大) 正雄の買ったのもこんな地図だったか。

鎌倉の史蹟を訪ねる

大山から須岬を通って江の島へ渡った。正雄たちは恵比寿屋へ泊る予定だったが満員でごった返していたのでしかたなく橘屋へ移って泊った。一

夜明けても江の島の天候はおさまらず、晴れ間もあつたが時々大雨というなか、天気さえよければ「海上の眺望、絶景言語に尽し難し」（植田孟緝『鎌倉攬勝考』）という所、一行は船頭町へ行って漁師を雇い、網を打たせたり鮑を捕らせたりして、酒肴とした。なんとも豪勢な遊びである。江の島を午前中に切り上げ、次の観光地・鎌倉をめざした。

鎌倉の史蹟を訪ねる

次に日記本文から紹介する。

それより金平は駕籠に乗り七里が浜へ出で、雨風はげしく浪荒くして漸く鎌倉へ入る、茶屋へ休み絵図などを買ひ、それより案内人を連れ所々を聞き見物致す、先ず皮野又三郎上下拾一人腹切塚これあり、日蓮法師けさかけの松（今は枯れくちて根ばかり）、それより星の井を見る、それより早瀬の観音、それより高德院の大仏を見物す、次に景政の社へ参詣し少々休み、力だんごを食す、景政袂石、手だま石ト二ツ有り、手玉石は三十貫目あり、袂石は十五貫目あり、それより甘縄明神に参詣す、是は八幡太郎を祭り奥の院は天照大神宮を祭る、盛久敷皮の社、それより尊氏屋敷、畠山繁只屋敷見物致し、それより八幡宮前松尾といふ宿へ付き入湯し、同夜酒肴を取り女三人ばかり喚（よび）三味せんなど引かせ動（さわ）ぐ、それより四時頃に支舞、夕飯し打伏

＊

鎌倉見物は七里が浜から始まる。初めに茶屋で休むが、そこで鎌倉観光地図を買ひ、さらに観光ガイドを雇っている。この頃発行されていた観光地図の部分掲げておく。

最初の「十一人腹切塚」は、新田義貞の鎌倉攻めの時十一人が討ち死にした場所で十一面観音を祀った。正雄はこの頃『太平記』を一生懸命読んでいた様子があるので関心も強かったらしいが、なぜ「皮野又三郎」なのか、現在は「大館又二郎」以下十一人との碑が立つ。『新編鎌倉志』は「勇士十一人未考」として名前は不明としている。

「是政の社」は「御霊神社」であろう。鎌倉五郎景政を祀る。景政は鎌倉を名乗っているように鎌倉の土地の開発領主である。十六歳で源義家に

従って後三年の役で勇猛に戦った。目を矢で射られた時助けようとした同僚の武士が、顔に足をかけて矢を引き抜こうとした。景政は「矢で死ぬのは本望だが足で顔を踏まれるのは武士の恥辱」と激怒して切りかかったという。「御霊」は「五郎」から来るといわれ、非業の死を遂げた者の怨霊を祀ったともいう。

源頼義が祈願して八幡太郎義家を授かったという神社が甘縄明神である。

次の「盛久」は主馬盛久（平盛久）で壇の浦合戦で敗れたのち京に潜伏して千手観音を信仰していたが、下女の密告で見つかり鎌倉で斬られることになった。ところが観音様の御威光で役人の刀が折れ光を発したという怪奇が起こり、頼朝は罪をゆるして所領を安堵したという。この時ここに敷皮を設けたので「盛久敷皮蹟」と『風土記稿』には記されているが、現在現地に立っている碑には「盛久の頸座（くびざ）」と書かれている。

ついで足利尊氏と畠山重忠の屋敷跡を見物している。しかし『新編鎌倉志』では尊氏屋敷の絵図として田圃を示しているだけであるが、正雄たちは屋敷跡として何を見たのであろうか。

鶴岡八幡宮と大塔宮の土牢

○七月五日 晴天

五時頃に松尾屋を出立し八幡宮へ社参詣、案内人連れ八幡宮地内色々見物、男この石・女陰の石など見る、又は蛇柳など見る、この柳は頼朝公御子実朝公の御歌にて、刈れたる柳又目をふきたる由也、それより色々八幡宮の社の内に所々見物致し、それより頼朝公の屋敷跡、次に同公の墓前、又嶋津忠久の墓前、それより大塔の宮の土牢を見物し、それより案内人を返し鎌倉方へ行く、朝伊奈の切通しにて休み酒少々喰ひ、あまり暑をわする、よき風ありければ一首詠む

鎌倉の木のかげにしばし休まして

暑（うさ）をわする、初秋の風

＊

次の日は八幡宮参拝である。ガイドに連れられ

八幡宮地内でいろいろ見学したが、「男根石・女陰石」のことを記している。現在「政子石」の名で残っている二つの石がそれではないかと思う。また、「蛇柳」は現在は見られないが、当時、弘化三年の奥州亙理藩・佐藤脩亮の旅行記『丙午紀行』に、「柳の古木ありて、蛇柳と称す、一度枯れしところ、実朝卿《千年ふる鶴ヶ岡邊の柳はら青みにけりな春のしるへに》といふ和歌を詠し再び葉を生すといへり」とあって、正雄と同じことを書いている。別の本では北条泰時の歌とも書かれている。

そのあと、頼朝の墓、島津忠久の墓へ詣でた。鎌倉観光の最後に、「大塔宮の土室」を見物した。大塔宮護良親王が足利直義によって捕らえられ閉じ込められたところと伝えられる。正雄が行った頃の江戸時代の図が『新編鎌倉志』に載っている。洞窟あるいは鎌倉に多い「やぐら」のように見えるが、『風土記稿』では山腹の土穴などではなくて「土もて塗籠たる獄舎」つまり土で塗り込めた部屋（土籠）というのを土牢とした誤解であるといっている。正雄たちは『新編鎌倉志』の図にあるような土穴を見たのである。明治二年、明治天皇の意思によりこの土牢のある場所に鎌倉宮がたて



広重画「武州金沢風景」 正雄たちと同じように遠眼鏡で金沢八景を楽しんでいる人たちが描かれている。HP より

られた。

大塔の宮の土牢を見学したところで鎌倉観光を切り上げ、観光ガイドと別れた。そのあと一行は朝比奈切通しを通過して山を越え、金沢へ出る。峠の茶屋で一首詠んだのを認めている。

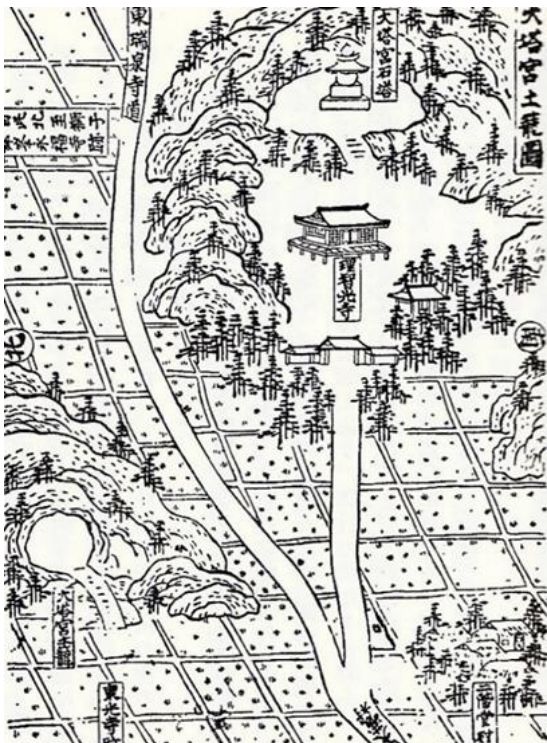
金沢八景の景観

それより下り金沢へ出る、茶屋に休みそれより八景を詠むる、金龍院地内の小山に登り茶屋に休み八景を詠める、遠目金にて見る、それより下りて金沢の能野屋へ休み、月代髪、酒肴取り、三味せん引かせ、それより昼飯し、金沢を立ち、それより能見堂にて休み詠める、それより中里にて休み次に関材にて休み、三門屋より健二郎と駕籠に乗り、程ヶ谷へ夕方付く、相模屋と云に泊る、入湯致し女郎衆を六人上げる、駕籠屋共六人也、それより酒肴を取り三味せん引かせさわぐ、それより四時頃に打伏す

*

金沢は鎌倉・室町時代には日本の表玄関として貿易船も出入りしていた。江戸時代には、元禄の頃明の僧侶心越禅師が、金沢の景色を中国の瀟湘八景になぞらえたことから金沢八景と称される名勝の地となり、大山参りのコースとして賑わった。

金沢八景は内川暮雪、平潟落雁、野島夕照、称名晚鐘など八つの風景として愛でたものであるが、その景色は能見堂からの眺望であった。ところが江戸時代後期、嘉永年間になると海岸の埋め立て



大塔宮土籠図。左下の土穴に「大塔宮土籠」と見える。上の理智光寺の所に現在鎌倉宮がある。『新編鎌倉志』所載。

による新田開発（泥亀新田の干拓）があり、内川の入り江の景観など能見堂からの景観が失われてしまった。

正雄たち一行が金沢で真っ先に登ったのは能見堂ではなく金龍院という禅寺であった。金龍院は境内裏山に九覧亭を建てて観光に供したので、ここからの眺望が金沢八景一の眺望として賑わうようになっていた。ちなみに「九覧」とは八景に新しい景色を一つ付け加える、という名称である。遠眼鏡も用意されていた。

正雄たちはこうして美しい景色を眺めて休むこと金沢だけで六か所の茶屋に立ち寄り、昼食もとった。

都市開発の進んだ現代では、湾岸の埋め立てはさらに進んで、八景も九覧も衰退しているが、「称名晚鐘」の称名寺と金沢文庫だけは静かなたたずまいを今に残している。

横浜開港場で検問をうける

○七月六日 晴天

六半時起き酒肴取り飲す、それより四時頃より支度致して出立、金平に大小をあづけ健二郎も同じ、金平駕籠屋壱人程ヶ谷より加奈川へ行く、健二郎と同道し供二人連れ野毛村へ出て、それより横浜へ出て関門へ通り掛り改らる、それより本町通りへ出で関門にて又々改らる、悉く厳しく、それ故小野田藤市門人之由申し候所、小野田方へ問い合せぬ内は返す事成らざる様申し候間、控え居り候処、小野田方へ出向き候様申し候間小野田方へ行く、藤市殿に対面し候処、先生も三四日前に京地より帰られ候由（頭注：小野田殿は侍壱人連れ）、それより九過頃に藤市殿町中を廻る改めなれば同道致し案内致すべき旨申され候に付、同道致し町中又は川岸見物致し、吉田端の番所より別れそれより四人にて船に乗り神奈川へ上り、それより台の下田屋に休み、金平外壱人居る、実に金平は案じ居り候由也、奥へ行き酒肴を取り女二人喚び三味せんなど引かせ遊ぶ、実に此家は景の宜敷き所也

〽 見わたせば行こふ船のかず見えて
心もすぐし波の上のかぜ
（神奈川のさと）

それより昼飯致し八時頃より出立し七半過に又々程ヶ谷宿相模屋へ行き入湯、同夜すゝみに出る、それより帰りに酒肴を取り三味せん引かせ遊ぶ、女郎衆六人上げる、さわぎ四前に打伏す

＊

程ヶ谷宿では女郎衆を六人も上げるなど豪勢なことであるが、翌日、外国貿易の始まったばかりの横浜を見物に出かけた。横浜の開港場には吉田橋に設けられた関門を通過しなければならなかった。ここの警備が大変厳しかったことが日記から読み取れる。

正雄たちは二度にわたって検問を受け、窮余の一策で「天然理心流の小野田東市先生の門下である。決して怪しいものではない」と申し開きをした。当時剣客として名高かった小野田は、万延元年に神奈川奉行所同心役、ついで武術師範として横浜に勤務していた。のち慶応二年に江戸で講武所師範役となる人物である。小野田はかつて多摩の村々とは天然理心流の剣術で交流があり、駒木野出身の川村恵十郎は小野田の門人であった。だから正雄も面識があったのであろうか、関門でとっさに小野田の名前を出して通してもらおうとした。すると関門の役人は、「それでは小野田の役宅へ行って確かめるので、それまでは通すわけにいかない」とまで言う。正雄たちは、役人共々小野田の役宅を訪ねたところ、幸い先生はちょうど京都から帰ったばかりで面会することができた。この年文久三年、将軍家茂の上洛警護のための出張から帰宅したところであった。正雄たちは小野田先生が横浜開港場の警備のために巡回するのでそれについて回り、横浜の新しい町を案内してもらったこととなった。

一廻りして吉田橋の番所で別れ、一行は舟に乗って対岸の神奈川宿へ到着、台の下田屋へ向かった。別行動をとっていた同行の金平は先に来ていて、大変心配していた様子であった。

以上、鎌倉見物を中心に紹介した。正雄たちはこのあと、町田を通って駒木野へ帰った。一週間にわたる旅であった。

多摩地域に自由民権運動の軌跡を訪ねて

村 木 逸 子

平成 29 年 3 月 19 日 (日) 参加者 35 名 (うち友の会会員 3 名) 参加費 2000 円

「五日市憲法」発見の土蔵

<午前> 「五日市憲法」発見の場である深沢家土蔵を訪ね、その時の発見者である講師新井勝紘先生の話聞く。

集合 8 時 50 分 五日市線「武蔵五日市」駅前
出発 9 時 10 分 電車の到着が遅れ予定時刻を過ぎて出発。徒歩にて約 1 時間 深沢家土蔵へ。

講師の新井勝紘先生は 1968 年 8 月 27 日、この土蔵の中に入り蔵の隅にあった風呂敷包みを見つける。宿に帰り広げてみて初めてこれが貴重な発見物であることを知った。

色川大吉先生のゼミに属する数人の学生が作業している写真なども持参されての説明であった。なお、土蔵の外側はその後補修されている。

その土蔵の中を見ることができるといので、重い門のついた土蔵を開けて中に入る。蔵の内外に沢山の「虫」がいてキャーキャー騒ぎながら当時の情景を思う。

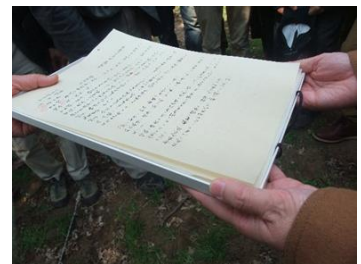
行って見て驚いたが、深沢家のあったところはかなり奥地、深沢家は今はなく裏山にお墓があるのみ。土地の人でもここが由緒あるところとは知らない。

予定では「五日市郷土館」を訪ねることになっていたが、時間がなく途中の「五日市憲法草案の碑」の場所を見て駅へ。山々は梅が満開であった。

皇后が誕生日の折に「憲法」に触れ、「明治の初期に民権意識をもって政治参加や未来への希望を語り、憲法草案を作った人がおり、その記録が残っていることは素晴らしい」と讚えたことでまた最近注目されている「五日市憲法」であるが、新



井氏の話では皇后はこの憲法については「五日市郷土館」で説明をうけたという。



<移動> 五日市から町田まで

上：深沢家土蔵 中：土蔵の中
下：複製された「五日市憲法」

路線バスタイプのバスに乗り、バスの中で昼食と休憩をとる。お彼岸の時期で交通渋滞が予想されたが、2時間かからず目的地に着く。現在の交通機関（電車）によると五日市・八王子・町田は離れた位置にあるように思えるが徒歩や馬車、ある

いは水運による通行の時代には相互の交流は今より盛んだったのかもしれない。残念ながら昔の道と現在の自動車道路を比べてみる作業はできなかった。

町田市立自由民権資料館

<午後> 「町田市立自由民権資料館」にて学芸員の説明を受ける。時間がなく展示を丁寧に見ることができなかった。地図を見て、神奈川県に武蔵6郡が所属していた時代(～明治26年)を確認。自由民権運動の中心は多摩、その担い手は富裕な農商民だった。

ここで、石阪昌孝、村野常右衛門の二人の事績を確認。二人とも多摩郡野津田村に生まれ戸長、区長などを務め、民権運動に生涯を捧げた。この資料館は村野氏の文武道場「凌霄館」の跡に建てられている。

資料館ではこの時期「町田自由民権カレッジ」など市民の学習会の経過・成果の展示があり、そこにも行ってみたいと言われたが素通りに近かったのが申し訳なかった。

「五日市郷土館」同様「自由民権資料館」も再訪しなくてはならない。

民権史跡をめぐる

時間がないので急いでくださいと言われ、どこへいくのかもわからず、野を越え山を越えひたすら歩き、前方を歩く群団を見失わないよう気をつけて山道を歩く。雑木林の中に「民権の森」が見えてきた。



民権の森



自由民権資料館と「凌霄館」碑

「民権の森」は自由民権運動に生涯をささげ、<井戸堀>になってしまった石阪昌孝の屋敷のあった場所や雑木林を町田市が自由民権運動のさかんであった市の歴史を記念して「民権の森」としたところであった。

南の位置にボタン園があり、ボタン園の閉門が4時であるからと、正門に向かって駆け足!

石阪昌孝の長女が美那で美那は北村透谷と結婚した。二人が出会ったのがこの地であったということで当時の若者たちを掻き立てた民権運動を



自由民権の碑《美那子と透谷 出会いの地》

記念して「自由民権の碑」が建てられている。

今はまだボタンは咲いていず「ボケの花」が咲き始めているだけの淋しい場所であった。

さて次は・・・また山道に迷い込んだようだ。野津田公園に移築されている「村野常右衛門生家」を目標に歩く、歩く。公園で遊ぶ家族や子供たちを横に見ながら公園の隅にある建物に着いた。「見学無料」とあったが、現在補修工事中ということで中に入ることは出来なかった。建物の大きさや屋根の立派さを見て「豪農」の暮らしを想う。

この見学をもって「ハイキング」は終わった。今度は下り道だと自分を励ましながら、バス停までをまた歩く。路線バスに乗って約30分。予定より20分遅れで町田駅に着き解散。桜が咲いていたら途中で方向転換したかもしれない。かなりハードな行程だった。

「友の会」参加者3人のうち最年長のKさんが一番元気に歩いておられた。

写真上：村野常右衛門屋敷



全国歴史教育研究協議会大会に参加して

報告 多田 統一

7月27日(水)、浦和コミュニティーセンターで全国歴史教育研究協議会大会が開かれた。日露戦争を題材に小・中・高の連携をテーマにした分科会に出てみた。小学校では、人物学習が中心で、あまり歴史地図の活用はされていないようである。日本海の戦いでロシア艦隊を破った東郷平八郎を中心に授業を展開しているが、戦争への反対を唱えた与謝野晶子を登場させるなど、戦費負担に苦しむ国民生活のひとこまを紹介してもよかったのではないだろうか。中学校では、国際関係の視点が重視され、国内の問題との関わりについてはあまり触れられていないようである。また、歴史地図を活用することで、日本軍の進路やロシア艦隊の進路が空間的に把握できるのではないだろうか。税や軍隊食料との関係で、ワインやサケ・マス缶

詰などの殖産興業についても扱ってもらいたかった。日露戦争は、近代戦・物量戦となり多額の戦費がかかったが、内外の国債の他、国内の増税でまかなわれた。高校では、伊藤博文らの日露協商論と桂内閣の対露強硬論、幸徳秋水・堺利彦らの非戦論・反戦論と開戦論を主張する対露同志会の対立など、アクティブラーニングの素材としても面白い分野である。しかし、大学受験が大きく影響し、アクティブラーニングを実施している学校においても講義でまとめを行なうなど、授業デザインに苦勞している実態があるようである。

歴史教育において、小・中・高での学習内容や授業方法の連携を図っていくことは大切なことであるが、それには地理や国語との連携が必要であると感じた。

米ソ冷戦時代からグローバル化した世界へ

～現代アメリカ史を中心として～

東京大学大学院法学政治学研究科

久保文明 教授

高校世界史教育とアメリカ史

私の高校教育との関わりは、東京教育大学で講師をしていた時、そこに研修に来ていた高校の先生を教えたことと、慶応義塾大学時代に附属女子高にも教えに行った時の経験です。その生徒には、苦労しました。

アメリカ政治史の講座を置いている大学は少なく、アメリカ史を軽視する傾向があります。東京大学文学部の史学科も同様で、理由はアメリカの歴史は短いからだそうです。また、フランス革命とアメリカ独立革命とを世界史の教科書において、その記述に割いているページ数で比較すると、圧倒的に前者が多いのです。普通選挙の実施時期等をみると、イギリスよりも早くアメリカ合衆国では行っています。しかし、その辺りも歴史教科書では触れていません。

アメリカ史学会の特色は、歴史学だけではなく政治学や経済学などその他の専攻の人が多く所属しているということです。

アメリカ史の基本的特徴

演題には、冷戦時代からとありますが、冷戦以前から少し触れようと思います。

1776年7月4日の独立革命により共和制の政治体制となります。しかし、ヨーロッパに見られるような反動の動きは殆ど見られません。これはアメリカ史の特色です。封建制の時代や絶対主義の時代がなく、新大陸で人々は、迫害されたり経済的に行き詰ればイギリス本国へ帰ったりカナダ方面へ逃げてゆけばよかったです。フロンティア

や広大な土地空間の存在は、小農民の選挙権を保証したのです。タウンミーティングの制度がこちらに成立しました。

13の植民地では、中には貧農が不穏な動きをする邦があり、まとまった組織を作る必要が生じ、フィラデルフィアで憲法を制定し連邦を結成し、アメリカ合衆国が成立しました。19世紀後半のイタリアやドイツの統一国家の成立は軍事力によるものでしたが、アメリカ合衆国は異なりました。この従来はなかったような大規模な共和制国家は、中央政府の力は弱く、その政治体制はポピュリズムに基づいていました。独立戦争には常備軍ではなく民兵により勝利し、常備軍の保有を危険視しました。戦争が生じると大軍を編成し、戦争が終われば動員を解除し、軍隊は解散しました。このことは、アメリカ史の特色と言えます。新大陸に出来た新国家は、国内産業を保護するために、輸入品に高関税を掛け保護貿易主義をとりました。

以上のような流れは、1829年の第8代ジャクソン大統領出現となります（ジャクソニアンデモクラシー）。1830年代には、アメリカ全土で普通選挙が実施され、先にも述べたように、イギリス本国よりも早く、国民が国家元首を選挙で選ぶ制度が実現しました。

転換点と冷戦期

第2次世界大戦後、ソ連が占領地域を共産化し自由選挙を実施しないことを不審視し、1947年2月のトルーマン大統領の演説は、従来のイギリスの役割をアメリカ合衆国が引き受けるしかないことを表明するものでした（トルーマンドクトリン）。ソ連の膨張主義に対処するため封じ込め政策を実

施し、ベルリンの封鎖に対して大規模な空輸作戦を行いました。1950年6月25日勃発の朝鮮戦争では、連合軍の主力として戦い、1941年～1950年10年間で軍事費は従来の4倍となり、GDPの3%を占めるに至りました。この時期は、アメリカ合衆国の高度経済成長期にあたり、軍事費の増大も国民生活を圧迫するまでには至りませんでした。このようにしてアメリカ外交の基本路線が形成されました。エリート層が大衆に、アメリカの使命を説明するという構図が、形成されました。

ターニングポイントになったのは、ヴェトナム戦争でした。1963年に大統領に就任したリンドン・ジョンソン大統領の時代には、ヴェトナム戦争は拡大を続け、1969年には55万の大軍をヴェトナムに派遣しました。このヴェトナム戦争を境にアメリカ合衆国の国力は低下し始めます。

1981年に大統領に就任したレーガンは、対ソ政策を厳しくしました。戦略防衛構想(SDI)を打ち出しました。これはスターウオーズというべきもので、ソ連のミサイルを人工衛星から監視し、アメリカに向かうミサイルを宇宙空間で迎撃しようとするものです。このSDI構想に対抗しようとするソ連にとっては、膨大な費用を必要とし、当時の首相ゴルバチョフや外相シュワルナゼにとっては、ショックなことでした。今後、ソ連は次第に疲弊して行きます。1989年12月にソ連は消滅し、冷戦は終了しました。

冷戦終結後の内政と外交

1990年代のブッシュ(父)大統領の時代には、冷戦体制を維持し続けるか否か、大軍の常備軍を持ち続けるか否かの議論をアメリカ政府の中核部はしなかったようです。そうこうしている内に、2001年9月11日の事件(多発テロ事件)がおきてしまいました。このままにしたら核兵器やダーター兵器を使用したテロの過激化を許してしまう恐れがあり、アフガニスタン戦争や2003年のイラク戦争(湾岸戦争)に介入しました。

民主党のオバマ大統領は、このイラク戦争を誤った戦争と評価し、アメリカ軍をこの地域から撤

退させました。アメリカ合衆国が中東地域に気を取られている間に、中国の軍事的な力や経済力が増強され、中国勢力の南シナ海への膨張が見られるようになりました。

トランプ当選をめぐる

トランプ大統領の当選の背景には、難民の受け入れ問題や不法移民問題、人種問題があると言われています。また、2015年の統計によると、アメリカ国民の平均寿命が短縮されたということもあるようです。これは、特に、学歴が高卒以下で40歳～50歳代の白人が、麻薬などの常用により死亡率が上昇したためと考えられています。従来の政治は、マイノリティには目を向けるが、しかし、中間層以下の多くの白人を無視する傾向がありました。これら中間層以下の白人の多くは、「アメリカファースト」を掲げるトランプ候補に投票しました。

今回の大統領選挙の候補者は共和党候補も民主党候補も2人とも、反TPPでした。現在のアメリカ合衆国は、トルーマンの時とは異なる時代になりつつあるように思われます。また、現在のアメリカ合衆国は、移民や難民を受け入れるなどして人口は増加し、シェールガス等の増産により経済成長率は上昇しつつあります。また、南シナ海対策としては、12カイリ自由航行作戦を実施しています。(豊田岩男 記)

友の会だよりへ投稿のお願い

例年同様7月中には発行します。以下の要領で会員の皆様の原稿をお待ちしています。

内容：研究要旨、資料紹介、書評、紀行文等何でも。

字数：2000字～3000字

著作を刊行された場合には書籍そのもの、または要旨をお送り下さい。紙上でご紹介します。

送付先：〒191-0033 日野市百草971-158 増田方
東京都歴史教育研究会友の会事務局

原稿はメールでお送りいただくと助かります。
送付先は別途ご案内しますのでご連絡ください。

満州開拓平和記念館を訪ねて

村木逸子

雑誌「婦人の友」2016年8月号に「歴史を見る目を育てる」と題して作家井出孫六氏と「満州開拓平和記念館」の事務局長三沢亜紀さんの対談が掲載されこの会館のことを知りました。

井出孫六氏は信州の生まれで中国残留孤児についての著書などがありますが、三沢さんは広島県因島の生まれで信州とは全く縁がなかったそうです。結婚して長野県飯田市に住み、地元のテレビ局に勤め地域の取材をするなかで満蒙開拓団のことを知ったということです。出身地広島の場合、夏休み中でも8月6日は学校に登校し原爆に関連する平和学習があり歴史が伝えられているのに長野県では三沢さんの周囲の人が殆ど満州開拓に関わる歴史を知らなかったことに驚かれたそうです。次第にわかってきたことは、長野県の場合は開拓団にかかわった色々な立場の人がいて、この歴史に向き合にくい事情があったことでした。外部の人だからこそできることがあるのではないかと「記念館事業準備会」に入って活動し、現在は事務局長を務めています。

原発事故が契機に

2006年に設立準備会がスタートしましたが資金が集まらず苦勞されたそうです。そのようななかで阿智村が土地を無償で貸与すると申し出てくれて記念館建設が軌道に乗りだしました。2011年、東日本大震災に続き福島で原発事故が起こった時に阿智村の村長の胸に「満蒙開拓と同じ歴史が繰り返されてはならない」「住民の命が大切にされなければならない」という思いが強く湧き上がってきたそうです。いずれも国策として多くの人々が動員され、戦争や事故によって生活の場を奪われるという似た様相がみえました。過去の記



憶をとどめることが大切だという村長の強い意志が周囲にも理解され建設が進みました。建物には地元長野県の木材が使われるとして県からの援助もあって2013年4月に開館にこぎつけました。

歴史を後世に残す

我が国には第二次世界大戦に関するまとまった歴史資料館や記念館がありません。長野県は全国で一番多くの満蒙開拓民を出し、被害も犠牲者も多かったことはよく知られています。村や町ごとには関連資料が集められ記念館もありましたが長野県としてまとまった記録を残した場所はありませんでした。他の県にもありません。それゆえにこのような記念館をつくり、歴史を後世に残すことは極めて意義のある事業です。

満蒙開拓移民についての歴史は国としての検証もなされておらず、これを機会に多くの資料や体験談が集められていくことが求められます。記念館入口に石碑があり以下のような言葉があります。

前事不忘・後事之師

(過去を忘れず、明日の教訓とする)

歳月が経てばたつほどこの言葉の重みが実感できます。

会館の構成

会館は展示室が7の部分で構成されている。

①「時代を知るタイムトンネル」

右写真のような通路は木の香が漂う。両側に写真や当時のポスターなどが掲示されている。ポスターなどが、いかに「満州が楽園」であり「五族協和の理想社会」であるかを煽っていたかが実感としてわかる。

開拓事業について現地視察に行き、実態をみて移住に反対した村長の存在したことがこのコーナーで展示されている。村として国策に協力をしなかった場合には補助金などがカットされたり、分校が閉鎖されたりした。

②「大陸へ 映像で見る満蒙開拓」

様々な開拓の形態があった。映像と写真で当時の移住の様子がわかる。

1932年～1935年 初期の武装移民

1937年～ 分村・分郷移民

農業移民で分村方式をとったため植民する人が多かった。

1938年～ 満蒙開拓青少年義勇軍

満15～18歳の青少年で内地での訓練を受けた

③「新天地・満州 希望の大地」

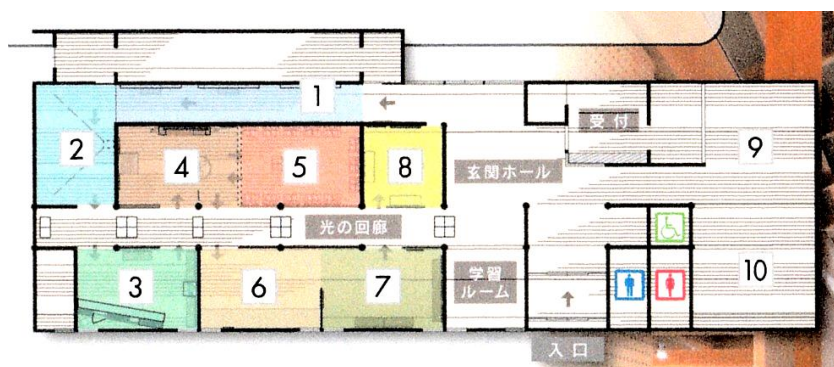
開拓団の住居を再現した模型、開拓団の入植した地点、全国からの入植者の数などが図表に示される。長野県がいかに多く送りだしたかがよくわかる。

④「敗戦と逃避行 絶望の彷徨」

これは今までも語られてきたが絵画による展示も生々しい。

⑤「証言 それぞれの記憶」

証言を伝える展示方法には工夫がこらされている。13人の証言は映像化もされているが、ここでは証言を文章にして「読み台」に置き、光を落とした静かな空間で、入館者一人一人が生々の記憶を



読むようになっている。

多くの人がこのコーナーの「証言」に大きな衝撃を受ける。

内容は <貧しさからの脱却> <移民推進役として> <現地の暴動> <逃避行> <集団自決> <極寒の収容所> <収容所から中国人の家へ> <引き揚げてから>

⑥引揚げ・再出発 失意の帰還

引揚げの写真もシベリア抑留の配置図も戦後の実際を伝えてくれる。失意の帰還をした人々は帰国後も苦難の道を歩む。国内で再入植をするがその土地は荒地で厳しい環境条件にあった。このことも忘れてはならない事実である。

⑦望郷 山本慈昭と残留孤児

日中国交回復後、中国残留孤児の存在を知り帰国支援事業に生涯をかけて奔走された山本慈昭氏の功績と、帰国事業の厳しさを記録してある。なお山本慈昭氏は阿智村出身で記念館近くに住職を務められた「長岳寺」がある。

残留孤児、残留婦人の帰国後についても苦難の現実があった。

⑧平和な未来へ 今私たちが出来ること

来館者からのメッセージが紹介されている。会館への訪問者は、実際に満蒙開拓に関わった人、その子孫、平和運動諸団体など多様である。それぞれの「感想」や「決意」を読み、次世代に記憶が伝えられていることを知り、嬉しく思う。



ついでに

前事不忘後事之師 過去を忘れず、明日の教訓とする。

満州移民の歴史を風化させることなく後世に伝える拠点として当「満蒙開拓平和記念館」が、民間運営ながらも、概ね賑調に2周年を迎えることができましたこと、これまでの多くの皆様方からのご支援の賜と厚く御礼申し上げます。

折しも、今年には戦後70年にあたります。元開拓団、中国帰国者の証言、体験談も益々貴重なものとなり、更なる伝承力の向上が問われる中、ここに望望の図録発刊の運びとなりました。

・20町夢の地主になる。満州は日本の生命線。

夢を抱いて渡った新天地「満州」でしたが、1945年8月9日、突然のソ連侵攻で戦場と化し、開拓団の人たちは広野を逃げ惑い、難民収容所でも飢えと寒さで大勢亡くなりました。また、帰還が叶わず残留孤児や残留婦人となった人々たちも少なくありません。

日中双方に多くの犠牲を生んだ悲劇「満蒙開拓」とはいったい何だったのか。戦争に巻き込まれていく連動を多岐八々の体験に耳を傾け、皆様と一緒に考えていきたいと思えます。

時は移ろいやすいですが、当館で考察を深め、修得されたことがいつまでも互いの心に留め置かれると共に、未来に続く平和への一歩となりますよう願っております。

ご意見・ご感想を寄せていただければ幸いです。

満蒙開拓平和記念館 館長 河原進

住所 長野県下伊那郡阿智村駒場 711-10
 電話 0265-43-5580
 休館日 火曜日
 入館料 一般 500円 小中高生 300円
 ホームページ <http://www.manmoukinenkan.com>
 アクセス 東京から高速バス伊賀良、飯田下車
 名古屋から高速バス 駒場 下車

⑨Café

⑩セミナールーム 学習ルームには多くの関係書籍があり、貴重な学習の場である。

戦争の記憶を記録、最後の時

記念館から DVD をお借りして体験談の映像を見たなかで強烈な印象を受けたことがある。多くの同胞を失い、辛うじて帰郷できたある老人の話。

「青少年義勇兵を志願するよう毎日校長室に呼ばれて説得された。兄弟が多いから五男や六男は口減らしに満州に行った方がいい。イエスと返事をしないと毎日授業も受けさせてもらえず3日間立たされた。そこでいやいやながらハイと返事した」。映画「西部戦線異状なし」のなかで、

「戦争にいきいたいと思う者は手を挙げよ」と先生が言う。生徒たちは次々と手をあげる……周囲の様子を見てつられる様に全員が戦場に行くことになる。この映画を見た際教師の果たす役割の大きさに驚き、あきれ、職務の重さを感じたが、ここも同様、いやもつとひどい。長野県の場合、教師からの働きかけが特に強かったのではないか。その加害者だった教師はどう罪を償ったのか！

分村形式で満州に移住した場合、それが中国人の農民たちを追い出して日本が手に入れた土地だと知った場合、土地の人と協調し合って耕作をし、仲良くした村はソ連軍が攻撃してきた際に中国人たちに助けられ被害も少なかったという話もあった。

戦争の体験（被害も加害も）を語ることを躊躇う場合、一つは思い出すことの辛さもあるが、もう一つ関係者への遠慮など事実を語れない事情があることを知る。戦争体験者が周囲に関係する人がいなくなった今になって初めて語れるという事情もある。

戦後 70 年ということはその記憶の記録の最後の時でもある。この「満蒙開拓平和記念館」の設立と活動は極めて大事なことだと思う。是非一度訪問されることを願う。

イラン・イスラム共和国の印象

増田 克彦

訪れた場所はテヘラン、イスファフーン、アケメネス朝（前 559～前 330）発祥の地ファールスのシーラーズ、ゾロアスター教の地ヤズド、それに、ササン朝（後 226～651）の風俗の残るアビヤネとオアシス都市カシャーンの計 6ヶ所に過ぎない。滞在期間は実質 6 日。従って、イランのほんの一部の印象であるのは言うまでもない。

清潔で人懐っこい人々

印象の第一、まずはその清潔さである。

落書きやごみの散乱する街路が旅する地には多くある。イランにはそれが殆どない。特にシーラーズの街には全くない。

男子トイレが全て個室というのも特徴である。イランの男性は立ったまま小用を足すことが無い。世界的に一般的な男性用トイレはアルメニア教会の付属トイレと観光客用に設置している空港の中の付け足し的なものだけである。ただ、頻繁に掃除をすることもあってしばしば床が濡れている状態なのはあまりありがたくはない。

ついで、治安の良さである。

イラクやアフガニスタン国境沿いが危険なの言うまでもない。ガイドブックには多少の注意が必要とあるが、夜間出歩かなかったこともあって全く感じなかった。イラン国民に対しては勿論、妙な味のノンアルコールビールはあるものの観光客にまでアルコールを完全に禁止しているせいもあるのかもしれないし、政治や社会が長期に亘るアメリカ主導の経済封鎖にもかかわらず、それなりに安定し相応のシステムが構築されていることからくるのかも知れない。事件はまず起こらない。失業率 8%だそうだが、ホームレスはいない。世界中どこに行っても見られる観光客にしつこくまとわりつく物売りは全くいない。スリなどを警戒

する必要もない。チップの習慣もない。

第三にはイラン人の人懐っこさであろう。

どこへ行ってもどこから来たのかと若者が声をかけてくる。ドイツ人やフランス人、中国人に比べ、アメリ

カと日本政府の政策からなのかもしれないが、日本人観光客が少ないこともあって殊の外珍しがられる。

そしてなんといっても、女性の美しさ、そして強さである。

ペルシャ系の女性の美しさはシルクロードやウズベキスタンを旅した折、強く感じたものだが、ここでは観光客を除いてほぼ全てがペルシャ人。女性は当然スカーフをしチャドルをまもってはいる。化粧の濃さが多少気にはなるがその顔立ちは素晴らしく整っている。イランの男性もわかっているようで、私の妻だ、美しいだろう、と我々に自慢するものさえいる始末である。

破壊と殺戮の歴史が

話は少々ずれる。イランの教育制度は就学年齢 7 歳、小学校 5 年、中学 3 年、小中 8 年間で義務教育、高校 4 年で小中高は男女別学。大学は専攻によって 4 年から 7 年までと様々。小学校の教員は全て女性、中高の男子校に女子教員はいない。大学への進学率は女性が極めて高く、大学生の多



1500 年以上燃え続けるゾロアスター教の火。

くが女性という。そして女性の社会進出も著しく、確かにレストラン等店を取り仕切っている多くが女性という印象を受けた。女性の強いモンゴルの男性が何もしないのに対し、イランの男性はよく働く。

勿論、ペルセポリス遺跡をはじめ、史跡の素晴らしさ、そして水を縦横かつ巧妙に使用した世界遺産に登録された各地のペルシヤ庭園の美しさは言うまでもない。

チャドルに触れておく必要がある。

殆どが頭からすっぽりと黒いチャドルをまとっている。多少厚めの物から羅のようなものまで生地は様々。若い女性は黒の下に色とりどりのスカーフをし、額からそれが見えるように工夫している。赤・黄・青・茶・ピンク・ベージュといった色のチャドルをまとっている女性も少数ながらいる。町のチャドル屋では様々な色と柄のものが売られている。強い日差しと埃を避けるにはチャドルは便利とはいえる。が、女性だけに特別な服装を強いるのはやはりおかしい。身体の線が露わにならないようにとのことなのだが、肌は隠れていても身体の線が隠れているとは必ずしもいえないのだ。

さて、筆者が訪問したのは2017年の5月末。イランの大統領選挙とアメリカ合衆国大統領ドナルド・トランプの初めての外遊、サウジアラビア訪問日程と重なった。いわゆる穏健派の大統領が再選されたことで現地ガイドは仕事が続けられると大喜び。ガイドのサウジ批判は手厳しい。筆者はドバイ経由でテヘランに入ったが、成田からドバイまでの飛行時間11時間、ドバイからテヘランまでが2時間、決して楽ではない。

テヘランの考古学博物館見学の後、世界遺産を



至る所にある募金箱。喜捨はイスラム教徒の義務。盗まれることはない。

前324のアレクサンドロス、紀元後7世紀半ばのアラブ、1256~58のモンゴルと三度にわたる破壊と殺戮の歴史があり、しかも19世紀後半からはじまる欧米列強による文化財の略取があつて、残念ながら古いものはあまりない。残されているものの多くはカジャール朝(1796~1925)以降の物である。

燃えつつけるゾロアスター教の火

見学した主な遺跡等を列挙すれば次のようになる。アケメネス朝の都、キュロス二世の墓のあるバサルガタエ、アケメネス朝の王墓ナグシェ・ロスタム、ペルセポリス。イスファファーンの8世紀に創建され12~14世紀に再建されたという最も古いモスクのヌマデジェ・ジャーメ。テヘランにあるカジャール朝のゴレスタン宮殿、エラムガーデン、カシャーンではカジャール朝のフィーン庭園。シーラーズにある14世紀に建てられたというアリー・エブネ・ハムゼ廟では女性全員寺院が用意したチャドルを着用させられた。イスファファーンにあるサファビー朝(1501~1722、1729~1736、1749~1773)の傑作とされるマステジェ・シェイフ・ロトフォーラー、1598年アッバースIのもとで建築が開始されたイスファファーンのイマーム広場、広場を囲む最上階に音楽室のあるアリ・カプ宮殿、1612年着工のイマームモスク、同じくイスファファーンにある17世紀半ばに建てられたアルメニア正教のヴァーнк教会。18世紀に建てられ、ヤズドで最も高い33mのバードギール・風採り塔のあるドラウト・アーバード庭園。1930年代以降使われなくなったヤズドの鳥葬の場である沈黙の塔。ヤズドで最も重要な、かつ異教徒の見学可能な、1500年間絶えることのない火の燃えるゾロアスター教アーデシュキヤデ寺院。加えて、カナートやキャラバンサライ。

薔薇の季節は終わり、乾燥しているため暑くはないものの連日30度、雨は降らず。イスファファーンでは10年ぶりの滔々と流れるザーヤンデ川のほつりを歩き橋を渡った。

イランは、もう一度訪れたい土地の一つである。



水郷柳川

2016年8月30日、残暑のきつい夕刻の4時過ぎに、西鉄・大牟田線の柳川駅に降り立つと、駅前には、どこの駅にでもありそうなこぢんまりとしたバスのロータリーがあり、鰻の店の看板に気付くくらいで、水郷柳川というイメージと重ならない。この度の初めての柳川訪問は、北原白秋の「歌枕」にでも触れてみようかと思って出掛けた旅である。

案内本には、駅前に「からたちの花」の歌碑があると書いてあったので探したが、なかなか見つからない。駅の観光案内所に入って訪ねてみると、若い女性の職員の方の反応も薄い。ややあって「あれかな?」ということで、その方が直接案内してくれた。

僕はてっきり石碑に白秋の手による文字が彫ってあるものを想像していたが、これが案内板のような白っぽいプラスチック製板?に黒い印刷されたような文字が並べてあって、どうみてもこれは歌碑ではない。観光用の看板のような感じである。私の期待が大きすぎたようである。

気を取り直して、白秋の「柳河風俗詩」の一節を思い出しながら、その詩の景観に出会いたく、地図を頼りに歩き始めた。

もうし もうし 柳河じゃ、
柳河じゃ
欄干橋をみやしゃんせ

(馭者は喇叭の音をやめて
赤い夕日に手をかざす)

柳川探訪記

黒田 比佐雄

薊の生えた その家は……
その家は
古い昔の遊女屋(ノスカイヤ)
人も住まはぬ遊女屋

裏の BANKO にある人は……

あれは隣の継娘、
継娘
水に映ったそのかげは……
そのかげは
母の形見の小手鞆を
小手鞆を
赤い糸でくくるのぢゃ
涙片手にくくるのぢゃ

もうし もうし 旅のひと
旅のひと
あれ あの三味をきかしゃんせ
鳩(には)の浮くのを見やしゃんせ
(馭者は喇叭の音を立てて
赤い夕日の街に入る)

夕焼け小焼け
あした天気になあれ

(『思ひで』より)

(※BANKO: 縁台、 鳩: カイツブリ)

駅前正面から延びる道を進み、間もなく右に折れて直進すると堀割に架かる橋にでる。その袂を左折して堀割に沿って西の方角に歩くと、赤い太鼓橋風の「欄干橋」が見えてきた。近づくと、その欄干橋は街なかから広い神社の境内へ続く入口で、その橋を渡ったところに何かの金属で出来たおおきな鳥居が立っていた。これがあの「銅の鳥

居」かと、その目指した所は「三柱(みはしら)神社」の前なのであった。

この欄干橋の袂は観光柳川川下りの和舟の乗り場になっており、丁度船頭さんが舟の整備作業をしていたので、「柳河風俗詩」の歌碑のことを尋ねてみた。その船頭さんの指さした先は、昭和 57 (1982) 年に架け替えられたという真赤な欄干橋の下袂であった。全く目立たないところに、道標のような細長い石碑が見えるだけで、近く寄ることもできないのでどんな文字が刻まれているのかも分からない。やはり、この時もおやおやと落胆させられた。だが、その昔、欄干橋は今よりもやや小ぶりの木製であったろうから、その石碑も周りの風景に馴染んでいたのであろうか、などと勝手に想像してみた。

欄干橋の擬宝珠は明治 45 (1912) 年に柳川城から移されたもので、現在 4 個だけは残されていて、他は戦時中の供出で無くなってしまったようである。

船頭さんが 5 時半に最終の舟が出るという。所要時間は 1 時間、しかも今夜泊まる「御花」が終点だというので、これはラッキーと堀割巡りの舟に乗って遊覧しながら行くことに決めた。

その年配の船頭さんと色々話をしてみると、船着き場の傍にある、1 階が柳川川下り観光の事務所になっている白い建物は、以前は「松月」という料亭で、それ以前は一時病院、元々は明治期に造られた遊郭(柳川ではノスカイヤとよぶ)だったという。そして、その 2 階・3 階は「松月文人館」として白秋の作品に関する資料が展示されているとのこと。

乗船の 5 時半までにはまだ 1 時間余りあるので、まずは「三柱神社」の境内から巡ることにした。欄干橋の先、正面に立つ鳥居は白秋の詩「柳川」に「かねの鳥居」と歌われている通り金属製である。だが、わたしの眼にははたして銅製なのかは分からない。話によると、この鳥居も戦時中の供出の憂き目をみて戦後建てかえられたものと言う。

この神社の三柱とは 柳川藩藩祖である立花宗

茂と義理の父、戸次鑑連(ベツアキツ)即ち立花道雪と宗茂の正室闇千代(ギンチョ・道雪の娘)の三霊神を祀っている。

境内は広い敷地(何せ 2 万坪という)で、神社は天明 3 (1783) 年 7 代藩主が城内三の丸に建立したのが起源で、文政 8~9 年に 9 代藩主によって現在の地に遷座された。日光東照宮と巖島神社を模して造営され、風格のある社殿であったようであるが、平成 17 年に本殿を残し消失し、その面影はない。現在復興事業を進めているとのこと。

境内の入口付近には幾つかの歌碑が点在していた。目についたのが「五足の靴ゆかりの碑」である。白秋は明治 40 (1907) 年、32 才の時、同人であった『明星』の「新詩社」の同僚、与謝野寛、吉井勇、木下杢太郎、平野萬理の 4 人とともに九州各地を旅し、主に平戸、島原、天草などキリシタン・南蛮文化を探訪した。その記念碑である。石碑には「…その帰途、八月二十一日茜色に染まる夕焼けの水郷柳河を逍遥して、高畑公園三柱神社太鼓橋際の風変わりな氷屋「懐月楼」の三階に旅情を慰めたことは『五足の靴』第二十三章「柳川」に詳しい」とある。

明治 42 (1909) 年に発表した『邪宗門』につながる旅であった。

また、近くに「立秋」の詩碑があった。

柳川のたった一つの公園に、
秋が来た
古い懐月楼の三階へ
きりきりと繰り上ぐる氷水の硝子杯(コップ)
薄茶に、雪に、しらたま
紅い雪洞(ぼんぼり)も消えさうに

柳川のたった一つの遊女屋に
薊が生え
住む人もないがらんどうの三階から
きりきりと繰り下がる氷水の硝子杯
お代わりに、ラムネに、サイホン
こほろぎも欄干に

柳川のたったひとりの NOSUKAI は
しょんぼりと

月の出の橋の擬宝珠に手を凭(もた)せ
きりきりと音のかなしい薄あかり
けふもなほ水のながれに身を映す

「氷、氷、氷、氷、……」

(『思ひで』より)

後に白秋は吉井、木下らと「新詩社」を辞し、
「パンの会」を立てて、自然主義に対抗し耽美主
義を表徴した。

神社から戻って、「松月文人館」(事務所の2階・
3階)に案内され、なるほどかつて料亭だったと
いう艶なる雰囲気の漂う佇まいの広間には白秋と
交流のあった文人墨客の絵画、書、色紙、置き物
が所狭しと並べられていた。その中に、父親の
実家が柳川の、檀一雄の色紙が印象に残っている。
翌日訪れる藩主立花家の国元の菩提寺、黄檗宗福
巖寺には檀家お墓所がある。

さて、5時30分、水郷巡りの和舟に乗船して
みたものの、乗客は私一人。何とも贅沢な、しか
し少々寂しい感覚が湧いていたところに、わざわざ
この観光会社の上司と思われる方が出てこられ、
こちらが名乗ったわけでもないのに「楽しんでく
ださい」と挨拶を頂き恐縮してしまった。

船頭さんは腰の部分にうろこ堀のような模様
の付いた白い袴纏を着た丸顔の中年の方で、明るく
気さくな人柄の甲高いテナーの声で、歌が大変好
きな方とお見受けした。何しろ水路の途中にまつ
わる話や歌碑についての説明以上に色んな歌を歌
ってくれる。特に、童謡「あわて床屋」は大変軽
快な節回しで、なかなか大した歌声であった。

「お客さんも一緒に歌いましょう」ってな訳で、
一緒に歌う羽目に。

～春は 早うから 川辺の岸に
蟹が店だし 床屋でござる

チョッキン チョッキン チョッキンナ～

船べりから眺める水郷柳川の風情は想像した以
上に心に焼き付く。

戦後、川の水質が低下して汚れていたようであ
るが、市民の協力も得て浄化に成功し、水面は、
市街地では河畔の柳並木を、また、かつて商業の
栄えた白い蔵のうろこ堀や煉瓦作りの倉庫のレト
ロな色彩を映し出し、舟は橋が架かるところは水
路は狭くなり水門をくぐる。民家も近くにあつて、
掘割に下りる小さな石段が作られており、かつて
は掘割の水は生活用水であったことを示している。

水のべは 柳しだるる橋いくつ
舟くぐらせて 涼しもよ 子ら

つかがむ乙の女童 影揺れて
まだ寝起きらし 朝の汲水場(くみず)に

やがて柳川藩主の別邸のあった「御花畠」に近
づく、鬱蒼と木々が石垣の上から水辺にせり出
し、この水路はやはり城のお堀であることを気づ
かせてくれる。

水郷柳河こそは
我が生れの里である
この水の柳河こそは
我が詩歌の母體である
この水の構図
この地相にして
はじめて我が體は生じ
我が風は成った

(『水の構図』より)

北原白秋の文学の原点はやはり柳川の水にある
ようだ。そしてこの日のように、柳川の風情は夕
焼けに映える時がよい。

小一時間ほどの舟遊び、宿の柳川藩主立花邸「御
花」の船着き場に到着して、舟から降りるとき、
船頭さんに酒代をつい奮発してしまった。

心地よい疲労感の中で

第3回真慈悲寺特別展 「今、よみがえる真慈悲寺—幻の大寺院を求めて—」を終えて

増田克彦

11月20日の日曜日、17時をほんの少し回った時刻、郷土資料館が主催する新選組のふるさと歴史館における幻の真慈悲寺調査事業推進プロジェクトの3回目となる特別展は終了した。

最終日のボランティアガイド当番を務めた梶谷尚・松村聖子両氏と筆者、それにこの日が新選組で混雑する第三日曜ということで、午後応援に駆け付けてくれた峰岸純夫・西村勉両氏の計5名、撤収作業に当たる郷土資料館の学芸員4名を歴史館に残し、既に暗くなった中、松村氏は自転車で、他の4名はバスで、それぞれ帰宅した。

率直な感想を言わせていただければ疲れた。しかし、嫌な疲労感ではない。特別展が開催されていた9月17日以降の凡そ2か月、筆者は9回歴史館に詰めた。9時・5時の凡そ8時間を通してほぼ立ちっぱなし、ひっきりなしのしゃべり、表現に困る部屋での10分足らずで済ます昼食。トイレも2回。

この間、筆者にとって日常の、日野市の合唱祭出演を含むコーラスの練習11回、元同僚との飲み会・会合5回、医者通い3日、国内外の旅行計15日、加えて真慈悲寺関連の歩きが2日、突然の法事1回と教え子との飲み会2回、その中でのボランティアガイド9日である。年齢から考えて、疲労感があってもやむを得まい。

07年の第1回、11年の第2回に比べ、当然のことながら展示内容は充実した。「今、よみがえる真慈悲寺—幻の大寺院を求めて—」なるテーマにふさわしい展示だった。完全に「よみがえ」っ



ケーブルテレビのインタビューに答える筆者

ているわけでもなし「幻」がとれているわけでもない、が、特に、百草八幡氏子会所蔵の国指定重要文化財阿弥陀如来坐像の展示がようやく実現したことは、この第3回特別展を魅力溢れるものにした。以前の展示会に用いたパネルが散見されることもあって少々わかりにくく来場者に不親切な部分もなしとは言えなかったが、小黒恵子学芸員の労苦は並大抵のものではなかったろう。

何人の来場者とお話をさせていただいたかはわからない。少なくない方が新選組の常設展見学のついでに覗いてくださった方々だが、阿弥陀様を見たくてとこちらの展示のために来館された方も多かった。普段散歩しているところにこのようとか百草にこんなことがと驚かれ且つ感激してお帰りになった地元や近隣の方も少なくない。早くはっきりするといいですねとか、これからがんばってくださいとの励ましの言葉もいただいた。なんとか史跡指定をと文化庁に話をしてみたいという方もいた。ありがたい事である。日野市内の

小・中・高校に関しては恐らくは連絡・通知が不足していたのだろう、問題なしとは言えないものの、年配の方の多い中で、高校生や大学生の来館はうれしかった。

ついでに言わせていただければ、今回もまた郷土資料館は、「市民共働」を謳っていたが、郷土資料館の我々ボランティアに対する対応も、我々ボランティアの郷土資料館への対応も、残念ながら本来のあるべき「市民共働」とは依然としてかなりの距離がある。

また、早急に解決すべき問題がある。一般的に地域住民の民度や文化程度を測る一つの指標となるのが地方自治体の文化財・歴史資料等の展示施設である。町おこしや観光という点から考えて新選組に特化した新選組のふるさと歴史館の存在を否定するものではないが、日野市郷土資料館展示室の貧弱さは、貧しさという点で、全国的に見て最底辺のレベルと言っても過言ではない、その問題である。

2016. 11. 20記

追記

このガイドは、9月17日から11月20日までの毎週月曜日を除く計56日間、登録ボランティア38名中実質18名、延べ129名によって行われた。また京王百草園の「梅まつり」にあわせ、2月18日から3月5日までの16日間、寒空の中、10時から14時、園内にパネルを並べてのガイド、というよりも宣伝が行われたが、こちらには実質13名、延べ32名のボランティアが参加した。

会員の訃報

河上一雄先生 2017年1月13日 75歳

兵頭信彦先生 2017年1月23日 93歳

謹んでお悔やみ申し上げます。

都歴研友の会ホームページ

<http://sky.geocities.jp/torekikentomonokai>

友の会の諸連絡、国内・海外研修旅行の記録、
「友の会だより」バックナンバーもカラーで。

会員の著書紹介

多田統一『取材する心—研究所めぐり』NPO
法人東京雑学大学講義テキスト

国立極地研究所、航空宇宙技術研究所、理化学研究所など計12研究所の沿革・組織・施設設備等を紹介している。A5判66頁、発行2017年5月25日、リーブルテック 非売品

歴史教育研究助成金

友の会が全歴研分科会での発表者に「歴史教育研究助成金」を贈る事業の2016年度の対象者。

第4分科会（世界史）

筑波大学付属高等学校 藤本和哉氏「知識偏重からの脱却」

第5分科会（博学連携）

学習院高等科 曾田康範氏「学校資料を活用した博学連携とアクティブ・ラーニング」

友の会第11回総会 速報

本会11回目の総会を、2017年6月17日に都立杉並高校小会議室で開いた。議長に黒田比佐雄氏を選び議事を進めた。

事業報告として、史跡見学会「源頼朝時代の鎌倉を求めて」を実施したところ参加者が多かったこと、前歴県大会での報告者への歴史教育研究助成金をだしたこと、そのほか友の会だよりの発行などを報告し承認された。

決算報告では、5名の方から寄付金があり、会員減にもかかわらず収入を確保できたこと、会報の印刷を地域の公民館を利用したので予算内に抑えたこと、しかし、郵送料が以前より跳ね上がったなど、経理のご苦労が報告された。また、ホームページ作成ソフトの購入により、本会のホームページがより充実したことが報告され承認された。

世話人は今年度も引き続き同じメンバーとすることが承認された。

事業計画として、①さきたま古墳群等見学会（11月）、②ミニ研修「王子駅周辺散策」（7月17日）、③研究会「近世文書購読」（9月）、④歴史教育研究助成金などを実施することが決まった。次いで、予算案が諮られ承認された。（重政）